

中期計画の項目	2－(4)－②	文化財情報基盤の整備・充実
年度計画の項目	2-(4)-①-1) 2-(4)-②-3)	①文化財情報基盤の整備・充実 1) 国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。 ②調査研究成果の発信 3) ウェブサイトの充実
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（主任研究員）、石灰秀行（主任専門職）、武藤明子（アソシエイトフェロー）、安岡みのり、高階郁美（以上、研究補佐員）、薬師寺君子（客員研究員）	

【年度実績と成果】 6年度は5年度に引き続き、文化財情報の文化財保護への活用という視点からの調査研究及びデータベースの構築、文化財情報の利用及び発信のための一層の環境整備を実施した。 (1) 調査研究及び成果公開 - 文化財情報及びその活用に関する調査研究を実施、当研究所でのデータベース運用及び活用、世界遺産一覧表登録推薦の評価プロセスの課題に関して論文や学会発表により成果を公開した。 - パネル展示「文化遺産保護と3次元計測」を5月27日に開始、関連の解説パンフレット（日英）を制作した。また、4年度実施「タイ・バンコク所在王室第一級寺院ワット・ラーチャブラディットの漆扉」のパネル展示を、タイ文化省芸術局及び同寺の協力によりバンコクで10月30日に開始した。更に、報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究(2) 英語版』を刊行した。 (2) 情報蓄積・発信機能の強化 5年度に引き続きウェブサイトのウェブアクセシビリティ対応を進め、資料閲覧室のウェブサイトの形式及び内容を全面的に更新した。また、笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料（作家ファイル）目録データベース等の新規ウェブ公開、及び既存データベースへのデータ追加を実施するとともに、所内データベースを適宜改良し利便性を高めた。また、X（旧Twitter）、Facebookによる情報発信を適宜実施した。 - 総合検索から国立文化財所蔵品統合検索システム ColBase に自動でデータを提供するための機構（API）を新たに開発した。 (3) ネットワーク環境の整備・充実 - 各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を実施、職員からのネットワーク利用に関する相談に応じ、情報システムセキュリティの確保に努めた。 - ネットワーク機器のうち仮想化基盤ストレージを更新、仮想化サーバの安定的な運用環境を確保した。また、当初予定の無線 LAN アクセスポイント（AP）に加え基幹スイッチを更新、より高速なインターネット接続実現のための環境を整備した。	 資料閲覧室ウェブサイト画面
--	--

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】 当研究所のウェブサイトは内製で、データベースも職員が独自に制作、開発しており、即応性が高く、効率的な情報発信を実現している。6年度はウェブサイトのウェブアクセシビリティ対応を更に進め、資料閲覧室のウェブサイトを全面的に更新できた。ウェブデータベースに関しても、新規公開、既存のデータベースのデータ件数増に加え、ColBase 等の外部データベースと総合検索とのデータ連携に関する取組を継続、ColBase については自動データ提供を初めて実現した。 また、データベースの運用及び活用事例、目録の活用の一例としての世界遺産一覧表について、論文や学会等での報告を通じて成果を発信、パネル展示は従来の当研究所ロビーのほか、共同研究先機関及び作品所蔵者の協力を得て海外で初めて実施した。 更に、仮想化基盤ストレージ、無線 LAN AP のほか予算の効率的な使用によって基幹スイッチを前倒しで更新、安定的かつ高速なネットワーク実現のための環境の改善を行うことができた。そのため所期の目標以上の大きな成果が得られたと判断した。	【目標値】 文化財に関するデータベースのアクセス件数：2,679,886	【実績値・参考値】 ①（実績値）データベースのアクセス件数 5,105,857 件 ②（参考値）データベースのデータ件数 1,948,320 件 ③（参考値）ア 報告書 1 件、イ 論文 6 件、ウ 発表 3 件	定量評価 A
ア 『Japanese Lacquerwork and Craftspersons in Thailand - Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand (2)』、東京文化財研究所、160p、3 月 イ 二神葉子「世界遺産一覧表登録推薦の評価プロセスにおける課題と解決に向けた取り組み―特に信頼性の確保について―」『美術研究』443 号、pp.1-30、10 月 他 5 件 ウ 小山田智寛「データベースにおける検索とキーワードの関係について」第 58 回オープンレクチャー、11 月 1 日 他 2 件			

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の目標を達成できている。7年度も、文化財情報の文化財保護への活用のための研究及び成果公開を行い、所内他部局とも連携して研究の実施・成果発信のための文化財情報データベースを一層充実させる。また、情報システムの安定的な運用を実現し、所内ネットワークの高速化を中心とした整備を実施する。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 1) 国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、産業技術総合研究所との共同研究に基づき文化財 3D アーカイブを中心とした文化財デジタルツイン事業を推進する。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室主任研究員）、張 賢雅（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、楊雅琲（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、Dudko, Anastasiia（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、武内樹治（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】	
(1) 第 18 回（2024 年度）にて文化財情報研究室が野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を授賞した。	
(2) 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている報告書抄録、報告書の各データベースに関して、データを入力・更新した。	
(3) 文化財情報データベースが保持している大規模データをもとに、AI を活用した新たな遺跡の発見手法を開発した。メディアにて全国報道され、今後の調査方法を革新するものとして全国的に反響があった。	
(4) 追加した新機能は以下の通り。 ・全国遺跡報告総覧 報告書種別の細分化とデータ遡及処理。トップページ改修 ・文化財総覧 WebGIS インターフェースの改修、時代別海面レイヤーを追加 新たな高密度地形データを追加 ・全国文化財情報デジタルツインプラットフォーム 新たに文化財の 3D モデルを追加	
(5) 『発掘調査報告書総目録』、『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 報告タイトル総目録 2024』『文化財防災関係目録』を刊行した。 文化財報告書のアーカイブの基礎情報となる総目録を 6 年度に 13 都道府県分刊行した。以前に刊行した 34 都道府県分を合わせ 47 都道府県分となった。また、『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 報告タイトル総目録 2024』『文化財防災関係目録』を刊行した。	
(6) 文化庁と文化財情報登録説明会を栃木県・福井県・鹿児島県で開催した。	
(7) 研究報告『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用』のダウンロード累計が 30,778 件となった。	



文化財オンラインライブラリー

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】		
第 18 回（2024 年度）にて文化財情報研究室が野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を授賞した。「全国遺跡報告総覧」の運用によって文化財調査報告書類の利用の便宜を大きく改善したことなどが評価された。集約した文化財情報は、学術研究、地域振興、文化財防災など多面的な活用が期待されている。 5 年度に膨大なデータを基に AI を活用した遺跡踏査の取組を発表したが、6 年度も引き続き社会的関心が高くメディア報道や講演が相次いだ。誰でも簡単にデータから遺跡を把握できるよう高密度地形データの登録公開を進め、19 の都道府県で視覚的に遺跡を把握できるようになった。引き続きナショナルセンターならではの大きな視点かつ最新技術での研究成果となった。 研究成果の統合プラットフォームとしての文化財デジタルライブラリー・文化財データリポジトリは、印刷物中心の媒体からデジタル時代への次世代プラットフォームとなるものであり、機械可読のデータ群は次なる AI 高度利用を可能にする基盤となるものである。データ登録については 6 年度も文化庁から地方自治体へ周知されたことで継続して協力があり、大規模なデータベースの維持に努めるとともに、確実なデータ提供を行った。公開データベースのアクセス件数は 5 年度比 181%であった。2018 年度より公開している『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用』1～5 号のダウンロード数が累計 30,778 件となった。全国の文化財担当者・学生・市民が閲覧しており、デジタル技術の適用について方法論を研究する拠点として示すものといえる。 本項目の事業について 2 件のテレビ報道と 19 件の新聞報道があった。 内容豊かなデータベースとして著しく発展しており、またナショナルセンターとして研究成果の社会への還元も行うことができたため、全体の評定を A とした。		
【目標値】 ・文化財に関するデータベースのアクセス件数：11,612,614 件	【実績値・参考値】※()内は、5 年度の実績 (実績値) 公開データベースへのアクセス件数 30,086,187 件 (15,491,094) (参考値) 公開データベースの件数 35 件(35) 公開データベースの一例：全国遺跡報告総覧 登録データ件数 452,538 件(436,328) 年間ダウンロード件数 6,291,234 件 (3,091,019) 年間ページ閲覧数 234,515,991 件 (138,132,833) 論文発表 19 件 (ア) 口頭発表 22 件 (イ) 刊行物 19 件 (イ) 文化財目録刊行数：14 件	定量評価 S
ア論文 高田祐一「AI 技術を用いた埋蔵文化財の把握の試み」他計 19 件、イ研究発表 高田祐一「文化財分野における LiDAR および 3D 技術の利活用-遺跡踏査を中心に-」他 22 件、ウ刊行物 『デジタル技術による 文化財情報の記録と利活用 7』他 19 件。		

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	6年度、野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を受賞した。主な功績は「全国遺跡報告総覧」の運用による文化財調査報告書の利便性向上である。AIを活用した遺跡踏査の取り組みは社会的関心を集め、高密度地形データの公開により19都道府県で視覚的な遺跡把握が可能となった。文化財デジタルライブラリー・データリポジトリは、デジタル時代の次世代プラットフォームとして機能し、AI活用の基盤となっている。データベースの維持・提供は文化庁と地方自治体の協力のもと継続され、『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用』のダウンロード数は累計30,778件に達した。文化財担当者・学生・市民に広く活用され、デジタル技術応用の研究拠点としての役割を果たしている。中期計画4年目の進捗として想定以上に進展しており、これらの成果により、非常に高く評価できると判断し、事業全体の評定はAとする。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-2)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 2)文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管及び公開活用に関して、技術面・法律面含めたガイドラインを作成する。また、文化財報告書に関する総目録を作成する。
プロジェクト名称	文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室主任研究員）、絹川桂（文化財情報係長）三谷直哉（文化財情報係、文化財情報研究室研究員）	
【年度実績と成果】		
(1)XR ミートアップ奈良@奈文研の主催・XR ミートアップ東京@東文研での共催 6月21日、奈良文化財研究所文化財情報研究室主催にてXR ミートアップ奈良を開催した。文化財分野以外から参加者も多数あり定員を超える110名の参加となった。アンケートに参加者の96%が「非常に満足」又は「満足」と回答した。参加者の62%が文化財分野以外の関係者であった。		
(2)文化財アーカイブのためのXRに関する連携研究を締結 XRプラットフォームを展開する株式会社STYLY及び歴史的建造物のBIMを手がける株式会社桑山瓦と3者の連携研究協定を締結した。		
(3)AR アプリ「平城京XR」の新規公開		
(4)文化財データリポジトリの運用 研究データを収集・管理・保存するためのデータリポジトリサービスを運用し、奈良文化財研究所が保有する約400枚の画像をオープンデータとして公開した。公開から44日経過後のダウンロード数が3273件となった。		
(5)公開活用に関する法律研究 文化財に関する知的財産権について有識者らと意見交換を実施し論考を第44冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用7』にて掲載した。		

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】		
社会的に3次元技術の浸透が急速に進んでおり、文化財分野においてもXR技術適用が喫緊の課題である。そうした課題に対して、6月に奈良文化財研究所が主催のXRイベントを開催、11月には東京文化財研究所と共催で開催し、平城京CGモデルをXRコンテンツ化して新たな文化財データ利活用のあり方を示した。XRミートアップ奈良では、参加者の96%が「非常に満足」「満足」と回答するなど非常に好評で、参加者全体のうち62%が文化財分野以外の関係者であったことから、広く社会に取組の効果を示すことができたと高く評価できる。また、文化財アーカイブのためのXR実践についてXRプラットフォームを運用する株式会社STYLY及び株式会社桑山瓦と連携研究協定を締結したことで、文化財アーカイブの持続可能なXRについて研究する基盤を構築できたことも特筆できる。さらに、11月24日には平城京城全体をカバーするARアプリ「XR平城京」をリリースしたが、低コストにて既存データの再利用可能性を示す事例として反響を呼び、3件の新聞報道があった。全国の自治体からも照会があり、今後の埋もれたCGモデルを再発掘し社会に展開する新たなテーマの掘り起しとなった。 また、文化財コンテンツを電子化及びインターネット公開するには、知的財産権の理解と整理は不可欠であるが、5年度に実施した法律専門家との検討を6年度で更に進めたことで、文化財に関わる知的財産権の公開することができた。 文化財データリポジトリについては、研究データの可視性・アクセス性・保存性・再利用性の向上を見込み、蓄積型学問となる文化財分野において、今後、重要なプラットフォームとなりつつある。奈良文化財研究所における画像のオープンデータ公開は、44日で3000件以上の画像がダウンロードされ、活発に利用されていることを示した。また外部問合わせなども激減し、事務量が減少するなど業務の効率化にも貢献した。以上から、非常に高く評価できると判断しA評価とした。		
【目標値】	【実績値・参考値】（参考値）	定量評価
	研究報告書刊行数：1件（ア） 知的財産権関連論考：3件 研究会：2回	—
奈良文化財研究所研究報告第44冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用7』（7年3月）		

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財に関連する情報・資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。 ①文化財情報基盤の整備・充実 文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

評定理由	文化財分野における XR 技術の適用に向けて複数の XR イベントを開催し、平城京 CG モデルの XR コンテンツ化という新たなデータ活用方法を提示した。既存の文化財関係者のみならず、新たに文化財に関心をもってもらえる層を獲得できた点は、高く評価できる。また、株式会社 STYLY 及び桑山瓦との連携研究協定締結により、持続可能な文化財アーカイブの XR 研究基盤を構築し、11 月には「XR 平城京」アプリをリリースして、既存データの低コストでの再利用可能性を示した。さらに、文化財データリポジトリについては、画像オープンデータ公開から 44 日間で 3000 回以上のダウンロードがあるなど、社会への成果還元及び業務効率化にも貢献することができた。以上の通り、中期計画の 4 年目として順調に遂行するだけでなく、調査研究の成果を目標以上に広く社会に還元することができたことから、非常に高く評価できると判断し、A 評価とした。
-------------	--

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①③・④	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 ③調査研究及び文化財防災に役立つデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 ④文化財に係る図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	○米沢玲（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（近・現代視覚芸術研究室長）、江村知子（文化財情報資料部長）、田代裕一朗（研究員）、小山田智寛（主任研究員）、山永尚美（アソシエイトフェロー）、寺崎直子、鈴木良太、山下麻依（以上、研究補佐員）ほか	

【年度実績と成果】

(1) 全所的な文化財情報の発信

・当研究所副所長を委員長とするアーカイブ WG を例年通り 4 回（6 月 12 日、9 月 5 日、12 月 12 日、7 年 3 月 13 日）開催し、アーカイブの拡充と積極的な情報発信を行うための協議を行った。

(2) 文化財研究のためのデータ蓄積と公開

・当研究所で所蔵している松島健資料を追加公開した（追加件数：354 件 8 月、148 件 7 年 1 月）。

・個人所蔵だった円空に関する資料を受け入れ、目録情報の整理を進めた（約 600 件）（12 月）。

・当研究所で所蔵している 4×5 写真フィルムの原資料とデジタルデータの整理を進めた（25,340 件）（12 月）。

・当研究所で所蔵している久野健資料を追加公開した（追加件数：約 13,400 件）（7 年 3 月）。

・5 年度に受け入れた前田青邨文庫について、東文研 OPAC 上で、リスト及び PDF の公開を行った（275 点）（12 月 25 日）

・資料閲覧室で収蔵しているマイクロフィルムのデジタル化を進めた（計 83 本）（7 年 3 月）。

・令和 5 年に受け入れた前田青邨文庫について、東文研 OPAC 上で、リスト及び PDF の公開を行った（275 点）（12 月）

・資料閲覧室で収蔵されている韓国絵画の調査写真 420 枚とそのメモ 146 枚をデジタル化し、資料集を刊行した（9 月 30 日）。

(3) アーカイブを利用した研究・外部機関との協力

当研究所所蔵資料を「没後 100 年・黒田清輝と近代絵画の冒険者たち」（東京国立博物館）、「雪村一常陸に生まれし遊歴の画僧一」（茨城県立歴史館）、「香取秀真の眼」（佐倉市立美術館）、「トキワ壮マンガミュージアムへの道～めさまし草あたりから」（豊島区立トキワ壮マンガミュージアム）、「池田蕉園と輝方 一夢見る美人画一」（山口県立萩美術館他）に貸出した。

・国内外の大学・大学院学生や専門家などを対象とした資料閲覧室の利用ガイダンス等を行った（7 月 3 日 共立女子大学、11 月 26 日 東京藝術大学、12 月 15 日 韓国史研究者（団体）、7 年 1 月 7 日 韓国梨花女子大学校）。

(4) 資料閲覧室の運営・管理・資料受け入れ数：・週 3 回（月・水・金）開室したほか、インターネット経由の資料複写や画像利用等の申請にも対応した。閲覧室利用状況：公開日総数 138 日・年間利用者合計 752 人 図書等の受け入れ数：和漢書 1416 件、洋書 115 件、雑誌 2526 件、展覧会図録・報告書等 1989 件（合計 6046 件）



韓国史研究者へのガイダンス（12 月 15 日）

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

6 年度に実施した書庫等の増床及び資料保管の環境整備を踏まえ、新たな資料（円空関連資料）を受け入れ、その整理とアーカイブとしての公開に向けた準備に努めた。新しく公開した資料（前田青邨文庫）に加えて、既に公開されていた資料についてもデータを追加し（松島健資料、久野健資料）、ウェブサイト上で利用できる情報を更に充実させた。

また、所蔵資料のデジタル化（マイクロフィルム、韓国絵画調査写真）を行い、原資料の保存環境の向上と利用者のアクセシビリティを高めた。資料閲覧室では来室者のみならずインターネットを介して専門的なレファレンスに対応したほか、大学院生に向けた利用ガイダンスの実施や所蔵資料の展覧会への貸出を行うなど、国内有数の美術資料の図書室としての役割を果たし、その存在価値を高めた。

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) 発表 2 件（ア・イ）、報告書 1 件（ウ）、論文 1 件（エ）	—
ア 山永尚美「行政機関で作成された映像資料とその関連資料の管理と利用可能性について」（東京文化財研究所、5 月 14 日）		
イ 橘川英規「美術司書の仕事」〈アート with〉レクチャー（泉屋博古館東京、12 月 6 日）		
ウ 田代裕一朗『東京文化財研究所所蔵 韓国絵画調査資料 資料集』東京文化財研究所、9 月 30 日		
エ 田代裕一朗「東京文化財研究所所蔵 韓国絵画調査資料に関する一考察」（東京文化財研究所、7 年 2 月 17 日）		

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	中期計画の 4 年目として継続的かつ着実に所蔵資料の収集と整理、電子化を進め、かつオンライン上で利用できるデータベースの拡充に取り組んだ。対面のレファレンスに加えて資料のオープン・アクセス化を進め、文化財資料の専門的図書室としての機能（閲覧室利用ガイダンス、レファレンス、展覧会への貸出）を強化することで、公共性と専門性を兼ね備えた運用を継続できた。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集。整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 4)文化財に係る図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○山上徹（総務課長）、西村隆利（総務課長補佐）、絹川佳（文化財情報係係長）、伊藤久美（事務補佐員）、山内章子（事務補佐員）、中西晶子（事務補佐員）、永岡美和（事務補佐員）、工藤亜矢（事務補佐員）、松永 由理（事務補佐員）	
【年度実績と成果】		
○資料の収集・整理・保管・提供 収集・整理・保管については、例年どおり滞りなく実施した。提供については、閲覧環境保持のため一般利用の人数制限及び利用時間の制限は設けた上で、来館者の安全性と利便性の向上に努めた。 また、寄贈図書の受け入れに関しては、整理、公開、提供への対応を実施中である。 購入図書 422 冊／寄贈図書 5,384 冊／雑誌 2,523 冊 一般利用者 110 人／利用冊数 460 冊／来館者複写件数 98 件 遠隔利用：複写受付件数 123 件／貸借受付件数 197 件		
○データベース運用 運用：定期的な OS パッチ適用、OS ログの確認等を行った。 ＜障害＞ 0 件 ＜データ登録＞「全国遺跡報告総覧」内で「学術情報リポジトリ」の内容掲載。 ・発信力の強化および業務効率化を図った。		

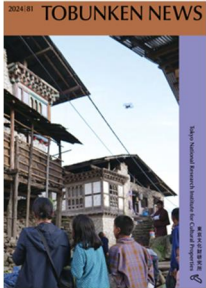
年度計画評価	B	
【評定理由】 図書資料室の利用に関して、ウェブサイトにおいて予約フォーム及び予約状況カレンダーを設置し、利用状況を随時公開することで、一般利用者の利便性向上を図るとともに、業務の効率化を進めることができた。また、インターネットが利用できない利用者に向けて電話予約等も受付け、幅広い利用者への対応に務めた。さらに、遠隔利用については業務整理を行い、研究所内外の利用者に対して円滑に資料提供を行うことができた。 研究成果の発信の場であるデータベースの運用にあたっては、適宜障害対策等を行った結果、6年度はトラブルによる停止等の障害は発生しなかった。また、データベースの新規公開や研究成果を広く発信するため、ウェブサイト上やSNSを利用し、広報等を行った。 以上の理由から、計画を順調に実施できたと判断し、B評価とした。		
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値)	定量評価
	・資料閲覧室・図書資料室の開室日数 148 日 ・資料閲覧室・図書資料室の利用者数 110 人 ・文化財に関する資料・図書等の総件数 525,816 件	—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関連する情報・資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。 ①文化財情報基盤の整備・充実 文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	中期計画に掲げた目標の一つである資料の収集において、調査・研究のための二次資料の収集が 5 年度に引き続き、予算削減等の理由により困難をきたしているものの、各自自治体が発行する調査報告書は従来どおりに収集・整理・保管・提供を行うことができた。また、6 年度も引き続き、他組織との共同研究等での新たな側面からのでデータベース発信を安定的に行うことができ、中期計画の 4 年目として順調に成果を得ている。7 年度以降も文化財に関する電子化でのアーカイブの拡充を継続的に行っていく。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイト充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』（年3冊） ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○齊藤孝正（所長）	

【年度実績と成果】

- ・『東京文化財研究所年報』2023 年度版
- ・『東京文化財研究所概要』2024 年度版
- ・『東文研ニュース』年 1 回(81 号)
- ・『美術研究』（443 号・9 月、444 号・7 年 1 月、445 号・7 年 3 月）
- ・『令和 4 年版 日本美術年鑑』（7 年 1 月）
- ・第 17 回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「宮菌節の魅力を探る」報告書（6 年 10 月）
- ・『無形文化遺産部研究報告』19 号(7 年 3 月)
- ・『第 19 回無形民俗文化財研究協議会報告書』（7 年 3 月）
- ・『保存科学』64 号(7 年 3 月)



『東文研ニュース』81 号

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

『美術研究』は毎年 3 冊を継続的に刊行しており、当研究所の研究員だけでなく、外部の研究者による最新の研究論文を掲載したほか、韓国の研究者による論文を日本語に翻訳して掲載し、東アジア美術の最新の研究動向を紹介することができた。

『無形文化遺産研究報告』では報文 6 件の論文を掲載したが、特に今号では能登半島地震の特集を組み、適時性の高い情報発信を行うことが出来た。また『無形民俗文化財研究協議会報告書』では「ステージ上の民俗芸能」をテーマに、民俗芸能の今日的なあり方を踏まえた保存と活用についての議論を収録し公開することが出来た。さらに公開学術講座報告書では、重要無形文化財保持者（各個認定）の二名をお招きした公開討論の様子を収録し、その成果を広く一般に公開した。

『保存科学』では主に保存科学研究センターの各プロジェクトの最新の研究成果を速やかに発表する媒体として機能しており、13 件の論文を掲載した。

また、広報誌『東文研ニュース』では、より広く、わかりやすく当研究所の活動について情報発信できるよう、広報活動を推進した。

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値)	定量評価
	・年報、概要、ニュース 各 1 点 ・日本美術年鑑 1 点 ・美術研究 3 点 ・無形文化遺産部研究報告 1 点 ・無形民俗文化財研究協議会報告 1 点 ・公開学術講座報告書 1 点 ・保存科学 1 点	—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	5 年度に引き続き、文化財情報資料部、無形文化遺産部、保存科学研究センターの各プロジェクトの研究成果を反映させた定期刊行物を当初の計画通りに刊行することができた。専門性の高い学術誌としての水準を保ちながら、当研究所の研究・事業内容をひろく一般に知っていただくために論文等をリポジトリでウェブ公開を行った。継続的に最新の研究成果をまとめた刊行物を発行し、情報発信を行ったこと、また冊子体とあわせて機関リポジトリに国内外からアクセスされ、利用されていることを評価した。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)2)3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイト充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行 ・『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈良文化財研究所発掘調査報告』・『奈文研ニュース』・『埋蔵文化財ニュース』 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講演会・現地説明会 3) ウェブサイトの充実 ・なぶんけんブログ等（コラム作賞樓等）
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
奈良文化財研究所	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○山上 徹（総務課長）、西川知延（環境整備課長）、西村隆利（総務課課長補佐）、永野陽子（環境整備課課長補佐）、桑原隆佳（総務課広報企画係長）、絹川佳（総務課文化財情報係長）、西村沙織（総務課広報企画係係員）新開良子（環境整備課係員）、ほか	

【年度実績と成果】

- 定期刊行物の刊行
 - ・奈良文化財研究所紀要 2024 8月刊行、PDF 公開（300部のみ印刷）
 - ・奈良文化財研究所概要 2024 9月刊行、PDF 公開
 - ・奈文研ニュース「No.93」「No.94」、WEB 公開
- 現地説明会等
 - ・平城第660次調査（西大寺金堂回廊）地元向け説明会
開催日：5月8日（参加者：114名）
 - ・平城第665次調査（薬師寺回廊西北隅）現地見学会
開催日：11月9日（参加者：1,201名）
 - ・飛鳥藤原第217次調査（石神遺跡）現地見学会
開催日：3月8日（参加者：619名）
- 講演会等
 - ・第130回公開講演会「東大寺東塔（天平塔）を復元する！」
開催日：6月29日 於 平城宮跡資料館講堂（来場者：253名）
 - ・第131回公開講演会「奈良時代の大嘗祭—聖武天皇即位1300年を記念して」
開催日：10月26日 於 平城宮跡資料館講堂（来場者：242名）
 - ・聖武天皇即位1300年記念 特別講演会「聖武天皇の宮—平城宮、恭仁宮、紫香楽宮、そして難波宮—」
開催日：10月27日 於 大阪歴史博物館講堂（来場者：210名）
 - ・第15回奈良文化財研究所東京講演会
「奈文研、食に挑む—ヒトは何をどのように食べてきたのか?—」
開催日：11月16日 於 一橋大学一橋講堂（来場者：174名）
 - ・奈良学園 SSH（スーパーサイエンスハイスクール）
開催日：7月22日、11月12日（参加者：生徒16名＋先生1名）
 - ・バックヤードツアー（奈良教育大学附属中学校）
開催日：8月23日（参加者：奈良教育大学附属中学校19名）
 - ・職場体験学習の支援（伏見中学校（10月23日～25日）（参加人数3名）、都跡中学校（11月6日～8日）（参加人数3名）、富雄中学校（11月6日～8日）（参加人数2名）
- ウェブサイトの充実
 - ・「なぶんけんチャンネル」において、6年度は新たに12本の動画を公開し、チャンネルの開設から現在までに143本の動画を公開している。（視聴数（オンライン）：91,652回）巡訪研究室、コラム作賞樓も引き続き公開した。

年度計画評価

A

【評定理由】

調査研究成果は刊行物として適時公表し、現地説明会や講演会開催の情報等についてはウェブサイト及びX(旧 Twitter)上で速やかに発信することで、当研究所における最新の成果を広く公開することができた。特に、調査研究成果については新たな情報やデータの追加及び更新により正確な提供を行うことを心掛ける一方で、ウェブサイトでは、多様なブログやコラム等を通じて、専門性の高い内容だけでなく一般の方にも身近な内容で発信することを努めた。

また、現地説明会等を3回開催し、発掘調査の成果を地域住民や一般の方に広く公開することができた。さらに、講演会については、公開講演会を春と秋に2回開催するとともに、一般の方でも親しみやすい「食」をテーマとした講演会を東京で開催した。東京での講演会は、4年度に開催した前回と比較して39歳以下の参加者が全体の20%と倍増し、アンケートによる満足度は79%と、より幅広い層から好評を博すものとなった。

加えて、従来から行ってきた近隣中学校の職場体験への協力だけでなく、新たに奈良県下のSSH指定校へ特別授業を開催するなど、学校教育現場において将来文化財を承継していく若者たち向けに研究成果の普及活動を進めることもできた。

このように、広く研究成果の発信、教育普及活動に取り組むことができたことから、非常に高く評価できると判断しA評価とした。

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) ・ 定期刊行物等の刊行件数 4 件 ・ 講演会等の開催回数 4 回 ・ 講演会等の来場者数 879 人 ・ 学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数 7,589 件	定量評価
		—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	定期刊行物及びウェブサイトにおいては調査研究の成果等を公表するものとして、計画通り順調に刊行や更新ができた。2 年ぶりに開催した第 15 回奈良文化財研究所東京講演会「奈文研、食に挑む—ヒトは何をどのように食べてきたのか?—」については、近畿圏外にも広く一般に研究成果の発信に取り組むため、一橋大学一橋講堂にて開催し、より多くの方に対して発信することができた。以上を含めて、今中期計画期間の 4 年目として、最終年度の今中期計画遂行における基盤となる事業を実施できたと判断し、B と評価した。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイト充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○江村知子（文化財情報資料部長）、小山田智寛（主任研究員）、田代裕一郎（研究員）、黒崎夏央（アソシエイトフェロー）ほか	

【年度実績と成果】 ○11月1日（金）、2日（土）の2日間、一般から聴講者を募集し、第58回オープンレクチャーを開催した。6年度は、中期計画の4年目にあたり、大テーマは5年度と同じく「かたちを見る、かたちを読む」とした。外部講師2名と職員の講師2名による2日間の開催とした。 ○講演テーマは次の通りである。 11月1日（金） ・小山田智寛（文化財情報資料部・主任研究員）「データベースにおける検索とキーワードの関係について」 ・逢坂裕紀子（国際大学 GLOCOM 研究員）「AI 時代におけるデジタルアーカイブー文化の保存・継承・活用に向けて」 11月2日（土） ・田代裕一郎（文化財情報資料部・研究員）「韓国陶磁鑑賞史ー韓国におけるコレクションの形成」 ・川島公之（蘭山龍泉堂代表取締役、東京美術商協同組合理事長）「中国陶磁鑑賞史ー近代のわが国における中国陶磁鑑賞の受容と変遷」 ○両日合わせて、外部からの聴講者138名が参加しアンケートの結果からおおよそ9割から「大変満足した」「おおむね満足した」との回答を得た。		
講演風景（逢坂） 講演風景（川島） 広報チラシ		

年度計画評価		B
【評定理由】 公開講座 1 日目にはウェブデータベースとデジタルアーカイブをテーマとして、社会的な重要性が急激に増大している情報通信や AI 技術についての課題と展望を、一般の聴講者にとってわかりやすく解説した。2 日目には韓国と中国の陶磁鑑賞史をテーマとして、若手研究者による発表と、世界的に活躍する古美術商であり研究活動も実践されている川島氏を講師に招へいすることにより、多重的な講演会とすることができた。参加者からのアンケート結果も踏まえて、所期の目標を達成できたと評価した。		
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) 講演会の開催 2 日間、講演 4 件	定量評価
		—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	6年度は今期中期計画の4年目に当たり、外部講師2名を招へいして2日間のオープンレクチャーを計画通りに開催し、文化財及びそれに関する最新の研究動向を踏まえながら、一般の聴講者に対して多角的、かつわかりやすい公開講座とすることができた。以上の理由から、中期計画を十分に達成できているとして、B評価とした。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。1) 特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部・文化遺産部・飛鳥資料館・都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 清野孝之（企画調整部長）、今井晃樹（都城発掘調査部副部長、馬場基（埋蔵文化財センター長）、○神野恵（展示公開活用研究室長）、小田裕樹（企画調整部主任研究員）、小原俊行（展示公開活用研究室研究員）、福島冠如（展示公開活用研究室 AF）、山本崇（歴史史料研究室長）、桑田訓也（文化遺産部主任研究員）、山本祥隆（文化遺産部主任研究員）、垣中健志（歴史史料研究室研究員）、目黒慎悟（建造物遺構研究室研究員）、和田一之輔（都城発掘調査部（平城）考古第一研究室長）、浦蓉子（都城発掘調査部（平城）考古第一研究室研究員）、丹羽崇史（都城発掘調査部（平城）考古第二研究室長）、川畑純（都城発掘調査部（平城）主任研究員）、田中龍一（都城発掘調査部（平城）考古第二研究室研究員）、谷澤亜里（都城発掘調査部（飛鳥藤原）考古第一研究室研究員）、岩永玲（都城発掘調査部（飛鳥藤原）考古第二研究室研究員）、道上祥武（都城発掘調査部（飛鳥藤原）考古第二研究室研究員）○石橋茂登（学芸室長）、清野陽一（同主任研究員）、竹内祥一朗（同研究員）、濱村美緒（同アソシエイトフェロー）○若杉智宏（都城発掘調査部（飛鳥藤原）主任研究員）	

【年度実績と成果】

(1) 平城宮跡資料館

- ・秋期特別展「聖武天皇が即位したとき。―聖武天皇即位 1300 年記念―」（10 月 22 日～12 月 8 日、42 日間、8,154 人）
5 年度出土した聖武天皇の大嘗祭に関連する木簡約 20 点を中心に、聖武天皇とともに歩んだ平城宮の歴史を物語る出土遺物を展示。
- ・春期企画展「発掘調査速報展「UnEarth2025」」（7 年 2 月 15 日～4 月 13 日、58 日間、4,722 人）※入館者数は令和 7 年 3 月 31 日現在の数値
6 年度と 7 年度の発掘調査の成果の速報展。
- ・その他、平城宮いざない館において夏期企画展「万葉挽歌（レクイエム）―人形からみた古の奈良―」を実施（共催：平城宮跡管理センター、奈良大学）（7 月 13 日～9 月 1 日 51 日間、22,613 人）。
奈良国立博物館ならび像館において、特別陳列「聖武天皇の大嘗祭木簡」を実施（共催：奈良国立博物館）（10 月 22 日～11 月 11 日 21 日間、38,518 人）。
- ・秋期特別展に伴う各種事業
 - 1) 関連講演会
 - a. 10 月 26 日に奈文研平城宮跡資料館講堂にて、第 131 回奈文研公開講演会「奈良時代の嘗祭―聖武天皇即位 1300 年を記念して」と題して、大嘗祭と大嘗宮に関する講演会を行った（参加者 242 名）。
 - b. 10 月 27 日に大阪歴史博物館にて、聖武天皇即位 1300 年記念特別講演会『聖武天皇の宮―平城宮、恭仁宮、紫香楽宮、そして難波―』を行った（参加者 213 人）。
 - 2) 関連イベント
 - a. ギャラリートークを実施した（6 回、参加者のべ 203 名）。
 - b. ナイト☆サイト☆ミュージアムとして、平城宮跡資料館の夜間開館、大極門前での歌舞、平城宮大嘗宮のライトアップを行うイベントを実施した（参加者 248 人）。
 - 3) 展覧会事業関連グッズ
キュートぐみの新キャラクターとして「神亀くん」を作成した。関連グッズとして、クリアファイル、木簡ストラップ、木簡ハガキ、トートバックなどを作成した（広報、都城発掘調査部、文化遺産部、展示公開活用研究室で分担）（グッズ売り上げ 5 年度比 109%）。
 - 4) 奈文研応援ガチャで出陳品、新キャラクターの缶バッジを作成した（ガチャ売り上げ 5 年度比 145%）。
 - 5) 広報活動
 - a. 記者レクを 2 回行った（10/2 所長、10/17 「聖武天皇が即位したとき。」展のレク 10/21 奈良博にて「聖武天皇の大嘗祭木簡」展レク（新聞報道記事 27 件、研究員の寄稿掲載 3 件掲載）。
 - b. 各種メディアに取り上げられた（ケーブルテレビ 2、ラジオ出演 1）。
 - c. SNS による発信を行った（X ポスト数 16、YouTube に予告 1 件）。
- ・平城宮跡資料館の常設展改修
キュートぐみを使って子ども用のパネルを追加した（追加パネル 12 点）。
- ・外部からの貸出依頼、資料調査、レプリカ作成に対し、展示品の出し入れを行った



秋期特別展ギャラリートーク

(2) 飛鳥資料館

- ・ミニ展示「高松塚古墳壁画 国宝指定 50 周年記念展」（4 月 19 日～5 月 19 日 27 日間、4,221 人）
- ・夏期企画展「第 15 回 写真コンテスト「飛鳥の音」作品展」（7 月 12 日～9 月 16 日 56 日間、3,200 人）応募 116 点
- ・秋期特別展「水と暮らしの風景史 古地図と景観がひらく飛鳥」（10 月 4 日～12 月 1 日 51 日間、6,370 人）

(3) 藤原宮跡資料室

- ・常設展示に加え、ロビーにて「石神遺跡南北溝 S D1347 A・B 出土の土器」（5 月 8 日～7 年 3 月 31 日）を実施した。また、調査速報パネル「日本最古級の九九一覧表」を展示し、併せて、解説資料を作成・配布した（9 月 17 日～7 年 2 月 20 日）。なお、常設展示の内容を一部リニューアルし、幟幡模型や藤原宮大垣の柱等の解説パネルを新規作成又は更新した。

年度計画評価		A
【評定理由】 平城宮跡資料館における秋期特別展の入館者数については、1日当たりの入館者で5年度比159%と大幅に増加した。奈良国立博物館での特集展示（奈良国立博物館との共催）では、さらに38,518人が入館し、奈文研の発掘調査の成果を発信することができた。また、展示に関連した講演会も奈良と大阪（大阪歴史博物館と共催）で行い、延べ486名が参加し、平城宮跡で行った関連イベント（平城宮跡管理センター、奈良女子大学と共催）においては、ツアーだけで248名が参加した。展示において年度目標値を上回る満足度を得られただけでなく、関係機関との連携の下に各関連イベント等を実施することができた点は、高く評価できる。さらに、関連グッズや奈文研応援ガチャの売り上げも好調で、奈文研や平城宮跡の認知度を高めることに貢献することができた。 飛鳥資料館のミニ展示では、高松塚古墳壁画国宝指定50周年の節目に併わせて展示機会の少ない平山郁夫らによる壁画模写を展示し、時宜を得た企画となった。また、秋期特別展は、これまであまり取り上げられなかった古地図や景観に焦点をあて、飛鳥地域の歴史と魅力について新しい視点を示した点で意義がある。 以上の通り、展示の内容を充実させたことで来館者満足度は目標を上回り、また、各種イベントや広報活動を積極的に行うことで来館者数が増加し、さらには関連グッズの売り上げも増加するなど、6年度の計画を大幅に達成できたと判断しA評価とした。		
【目標値】 (1) 平城宮跡資料館 特別展・企画展満足度アンケート 90% (2) 飛鳥資料館 特別展・企画展満足度アンケート 85%	【実績値・参考値】 (実績値) (1) 平城宮跡資料館 特別展・企画展満足度アンケート 98% (2) 飛鳥資料館 特別展・企画展満足度アンケート 89.4% (参考値) (1) 平城宮跡資料館 秋期特別展入館者8,154人、開催日数42日、刊行物等発行実績2件（ア・イ）。平城宮いざない館における夏期企画展「万葉挽歌（レクイエム）-人形からみた古の奈良」入館者22,613人、開催日数51日。奈良国立博物館における特別陳列「聖武天皇の大嘗祭木簡」入館者38,518人、開催日数21日。展示品の出し入れ6件（のべ13点）。(2) 飛鳥資料館 入館者数25,423人、開催日数301日、刊行物等発行実績1件（ウ）、特別展・企画展など3回	定量評価 B
ア)『令和六年度平城宮跡資料館秋期特別展 聖武天皇が即位したとき。一聖武天皇即位一三〇〇年記念-』（A4判フルカラー15ページ 10月22日発行） イ)『聖武天皇即位一三〇〇年記念 特別講演会 聖武天皇の宮-平城宮、恭仁宮、紫香樂宮、そして難波宮』（A4判フルカラー23ページ 10月26日発行） ウ) 飛鳥資料館図録第77冊『水と暮らしの風景史-古地図と景観がひらく飛鳥』（A4判フルカラー68ページ 10月4日発行）		

中期計画評価		B
中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、「新しい生活様式」を踏まえつつ、解説ボランティアを育成し、その活動を支援する。	
評定理由	平城宮跡資料館での展示について、5年度に都城発掘調査部から提供された約18年前の発掘調査時の動画を展示したことが好評であったため、6年度は秋季特別展の予告動画をYouTube公開するとともに、発掘調査の様子を記録した動画を編集して、木簡出土の瞬間の動画を展示することができた。5年度末に出土したばかりの木簡を展示に供する速報性、話題性に加え、SNSや動画配信による宣伝効果もあり、注目度、来館者アンケートの満足度の点でも中期計画を着実に遂行していると見える。	

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 2) 定期的に実地研修や動画配信を活用した研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○山上 徹（総務課長）、西村隆利（総務課課長補佐）、桑原隆佳（総務課広報企画係長）、岩井靖子（総務課事務補佐員）	

【年度実績と成果】

1) 解説ボランティアに関する会議

- ・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務部が一体となったボランティア活動を検討する会議、議題がある場合に開催 計4回開催）
- ・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と当研究所職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月1回、計11回開催）
- ・平城宮跡歴史公園ガイド連絡協議会（NP0法人平城宮跡サポートネットワーク、奈良県（平城京魅力創造プロジェクト_市）、国交省（平城宮跡管理センター）、当研究所の4者で行う国営飛鳥歴史公園内のボランティア活動等の情報共有、意見交換を行う会議：計3回開催）

2) 平城宮跡解説ボランティア研修及びボランティア交流会の開催

- ・平城宮跡解説ボランティアの知識を高めるため、平城宮跡資料館企画展・特別展の展示研修3回、奈文研研究調査成果研修3回開催した。また、奈良文化財研究所の職員及びボランティアとの意見交換の場としてボランティア交流会を開催した。

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

平城京左京三条一坊二坪発掘調査で「大嘗分」と書かれた木簡が出土した意義や課題など、直近の調査研究状況について、解説ボランティアへ最新の情報提供を行った。また、ボランティア研修を6回実施し、解説ボランティアの資質向上を図った。さらに、研究部内と事務部内が一体となって組織した「平城宮跡解説ボランティア懇談会」を定期的に開催するとともに、ボランティア連絡会を開催することにより、ボランティアとの意思疎通やボランティア活動の方向性等について意見交換を行い、活動の改善を図った。

また、当研究所の職員及びボランティアとの意見交換の場としてボランティア交流会を開催した。ボランティア交流会では、最新の研究発表を聴講するとともに、日々のボランティア活動での疑問や気付いたことなどについて意見交換ができるように研究職員と直接話す機会を設けている。この取組は、ボランティアの自己研鑽につながり、日々のボランティア活動にも活かされる。これらの取組により、ボランティアのモチベーションを保つことができたと考える。

以上のことから、本事業を着実に推進していると考えられB評価とした。

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値)	定量評価
	・解説ボランティア登録人数：108人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：38,832人 ・解説活動日数：264日	—

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、「新しい生活様式」を踏まえつつ、解説ボランティアを育成し、その活動を支援する。
評定理由	ボランティア連絡会議、ボランティア交流会を開催し、ボランティアのモチベーションの維持、意思疎通を図ることができ、中期計画の4年度目として、発掘調査成果における担当研究による研修等必要な対応を講じることができた。また、日々のボランティア活動で疑問があれば、書面による質問を受け付け、研究員から解説を行ったり、職員間で問題を共有したりして、改善や解決するための対応を行った。こうした取組により、ボランティアが自主的に英語勉強会を開催するなど、活動意欲の維持向上が見られており、ボランティアの育成及び活動の支援ができていると考える。以上を含めて、事業を順調に進められていると判断し、B評価とした。